

聖書：使徒 12：1～19

説教題：祈りの恵み

日時：2013年12月15日

11章の最後の部分で、シリアのアンテオケに設立された新しい異邦人教会がユダヤの兄弟たちに救援の物を送ったことが記されましたが、そのために派遣されたバルナバとサウロがアンテオケに戻って来るのが12章最後の25節です。このバルナバとサウロのエルサレム訪問に沿う形で、使徒の働き12章ではエルサレム教会の様子が記されます。この後13章からはパウロの世界伝道旅行のことが主に記されますが、だからと言って神の関心は異邦人世界にばかり向いて、エルサレムの教会が忘れられてしまったわけではありません。神はエルサレムにおいても豊かに働いておられたことが、この12章に記されています。

さてこの12章で私たちが知るの、エルサレムの教会が大変な危機的状況に置かれていたということです。1節2節を見ると、12使徒の一人ヤコブがヘロデ王によって殺されたと出て来ます。なぜこんなことが起こったのでしょうか。1節に「ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし」とありますが、その真の動機は3節にある通り、ユダヤ人の機嫌を取るということでした。当時すでにキリスト教はユダヤ教との違いが明確に意識されるようになり、ユダヤ人の中には、伝統的な信仰を脅かすクリスチャンたちの活動は抑えたい、できれば根絶したいという思いがありました。それをヘロデ・アグリッパ1世はいち早く察知して、自らの人気獲得のため、ヤコブを捕らえて剣で殺したのです。

このヤコブはペテロやヨハネと並ぶ12使徒の中心メンバーの一人でした。彼はまだ若く、これから活躍できる人です。そんな彼の地上の命が断たれてしまいました。そのことを思うと、私たちの頭には次のような問いが起こって来るでしょう。なぜ神はこのようない理不尽を許されたのか。彼の命がここで終わりになるのはあまりにももったいないことではないか。そして続く箇所ではペテロが助け出されたことを知ると、一層複雑な気持ちになります。なぜペテロは救い出されて、ヤコブはそうでなかったのか。しかし私たちが注目すべきは、この書を執筆したルカはこのことについて説明しようとしていないということです。これは人間的に色々理屈をつけて、私たちの好奇心を満足させるべき事柄ではないということです。むしろ神は起こり来る一切の事柄の上に主権を持っているとの聖書の教えに則って、仮に今、私たちに受け止めるのが難しくても、信仰によって受け止めるべきこととしてここに事実そのままが示されていると考えられます。

このヤコブについて思い起こすのは、かつて彼と兄弟ヨハネがイエス様のそばに来て、やがての栄光の座で一人をイエス様の右に、一人を左にすわらせてくださいと願い出たことです。その時、イエス様は「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっているのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」と言われました。それに対して彼らは安直に「できます」と答えました。それに対してイエス様は「なるほどあなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わたしの受けるべきバプテスマを受けはします。」と言われました。まさにその成就がこれであったと言えます。そういう意味でヤコブにとってこの殉教は、イエス様と共に苦しみの道を行くという栄光に値することであったと言えます。一方のヨハネは逆に使徒たちの中で一番最後まで生き延びまし

たが、黙示録にありますように、パトモス島に島流しにされ、彼も厳しい苦難の道を歩んだと言えます。私たちに言えることはそれくらいです。しかし私たちが心に留めるべきは、このようなヤコブの衝撃的な死を記しても、聖書は少しも動揺していないということです。すなわちこれは聖書においてハブニングではない。一見、あまりにも理不尽と見える事柄にも、今の私たちに理解できなくても、何らかの意味で神の最も賢い御心があるのだということを聖書はむしろ教えていると言えます。

私たちの生活にも思わぬ出来事が良く起きます。なぜあの人にはこのことが起こって、なぜ私にはそれが起こらないのか。なぜ同じでないのか、平等でないのか。私たちは苦々しい思いを持ったり、憤ったり、怒りの気持ちを持ちます。しかし神はご自身の計画をお持ちであられて、それを完全に成し遂げられます。ですから私たちは今その理由や意味が分からなくても、それは自分の頭が小さいからであるとわきまえて、やがての日に神にその意味を教えてください。ことを楽しみにしていれば良いのです。少なくとも言えることは、ヤコブはここで殉教の死を遂げたとしても、これで彼が何か損害を受けたわけではないということです。むしろこのような記事が聖書に堂々と記されていることによって、私たちは自分もまた理不尽な中に置かれても、なお神を信頼し続けることができること、いや信頼し続けるべきであると教えられるのです。

さてヘロデはヤコブを殺したことがユダヤ人の気に入ったのを見て、続いてペテロをも捕らえます。ヤコブに加えてペテロまで失ったら、キリスト教会はこの先、どうなってしまうのでしょうか。しかも今回ペテロはがっちり拘束されています。彼は二本の鎖につながれて、二人の兵士たちに結び付けられています。そして戸口には二人の番兵たちが監視し、四人一組の兵士たちが四交代でペテロを監視していました。そしてその先には第一の衛所、第二の衛所があり、さらに最後には鉄の門があります。とても隙を見て逃げ出せそうな場所ではありません。この時は過越しの祭りの時だったため、ヘロデはそれが終わったら民の前に引きずり出そうとしていました。

このようなペテロに対して、クリスチャンたちがなす術は何一つないように思われました。刻々と迫り来る処刑の日を、ただ無力感にさいなまされながら過ごすしか方法がないように思われました。しかし、5節には教会が用いた有効な対抗手段のことが記されています。5節後半：「教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。」この祈りこそ、これまで見てきた危機的状況を大きく変えるものとなります。ここには私たちが模範とすべき四つの彼らの祈りの特徴を見ることができます。一つは「教会は」とあるように、単なる個人的な祈りではなく、共同体が集まっての祈りであったということです。二つ目は「彼のために」とあるように、ペテロの救出を願う具体的な祈りであったということです。三つ目は「祈り続けていた」と記されているように、継続する祈りであった。そして四つ目は「熱心な祈り」です。このような祈りを通して、果たしてどんな導きを与えられたのでしょうか。

そのペテロの救出の様子が6節以降に記されています。まず注目したいのは、6節に「ヘロデが彼を引き出そうとしている日の前夜」とあることです。エルサレム教会はもっと前から祈り続けていました。しかしなかなか導きを与えられなかった。そしていよいよ明日、ペテロが処刑されようとしていた前日に、主の手が動いたのです。ここから私たちが覚えさせられることは、いつ主の導きを与えられるかは分からないということです。しばらく祈ってみて、どう

も聞かれそうにないからと言って、私たちは祈りをやめてしまつてはならない。最後の最後まであきらめてはならないのです。

またここでのペテロの姿にも注目させられます。彼はこの晩、何と彼は二人の兵士の間で鎖につながれながら熟睡していました！御使いが現れて、光で牢を照らしても起きない。わき腹をたたかれてもなかなか起きない。それほどぐっすり眠っていたのです！これは何を意味しているのでしょうか。これは主の摂理に対するペテロの信仰を現わしているのではないのでしょうか。イエス様もかつて嵐の中で、舟のともの方でぐっすり眠っておられたことがありました。その姿を彷彿とさせます。ペテロは彼の第一の手紙5章7節でこう言っています。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神に委ねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」ペテロは人にこう勧めるだけでなく、自らこれを実践していた人でした。心配事があるとすぐ夜も眠れなく私たちは、このようなペテロの姿から教えられたいと思います。

そしてついに御使いによる不思議な導きが与えられます。御使いがペテロに「急いで立ち上がりなさい。」と言うと、鎖が彼の手から落ちました。そして御使いは「帯を締めて、くつをはきなさい。」また「上着を着て、私について来なさい。」と言います。ペテロはこの御使いについて行きましたが、現実の事だとは分からず、幻を見ているのだと思われたとあります。それもそのはず、あり得ないことが次々に起こります。鎖から解き放たれたばかりか、戸口を出て、第一の衛所、第二の衛所もスルスルと通り抜けます。そして町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開きます。あり得ない話です。そして外に出て、御使いが離れ、我に返った時に、ペテロはこれが現実のことだと分かりました。それほど神がなさることは私たちの理解や考えを超えるものだということでしょう。私たちには考えられないからと言って、神が働かれる可能性を閉ざしてはならないのです。神にとって不可能なことは一つもないのです。人間にはできないことでも、神にはどんなことでもできるのです。神の前にはあらゆる可能性が開かれているのです。

さて、ペテロはその後、どうしたのでしょうか。最後に見たいのは、彼が帰って来た時の、祈っていた人々の反応についてです。ペテロはマルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家に人々がいつも集まっていたことを知っていたので、そこへ直行します。するとそこではまさにペテロのための祈り会がなお続けられていました。ペテロはその家の入口をノックします。するとロダという女中がまず応対に出ます。彼女はペテロの声だと分かると、喜びのあまり、門を開けもしないで奥へ駆け込みます。もしここで彼女が門を開ければ、何の問題も起こらず、ペテロは直接人々の前に自分を現わすことができたでしょう。しかし彼女が開けるのを忘れたため、ユーモラスな話が続きます。ロダが外に立っているのはペテロだと告げると、人々は何と言ったのでしょうか。何と「あなたは気が狂っている」と言ったのです。彼らはペテロが助け出されますようにと熱心に祈っていたのに、ペテロがここに来ています！と聞くと、そんなはずはない！そんなバカな話はない！おまえは気が狂っている！と言ったのです。彼らは祈りながら、信じていなかったということでしょうか。それに対してロダが、本当ですと言い張ります。すると人々は、そこに誰かがいるとしても、それは彼の御使いだ！と言います。ペテロを守るために神が遣わした守護天使が分身のようになってここに来たのだろう、と。とにかく要点はペテロがそこにいるはずはない、ということです。このように当時のクリスチャンたちの祈りは完全ではありませんでした。彼らの祈りは多くの点で模範的であったとは言え、欠けも

また多くあったのです。しかし私たちが心に留めるべきは、そのような祈りに主は耳を傾け、その祈りに豊かに答えてくださったということです。

これは私たちにとっても大きな慰めです。もし完全な祈りでなければ主に聞かれないというのであれば、私たちは望みを持つことができません。私たちの祈りも欠けだらけです。しかし素晴らしい事実は、そんな祈りでも神に用いられ得るということです！神は喜んで私たちの祈りに聞いてくださり、私たちの弱さに妨げられることなく、ご自身の最善をなしてくださるのです。このことを思う時、祈りは何という大きな恵みの手段であると言うべきでしょうか。私たちは祈りを通して、何と豊かな神の恵みと祝福を期待できると言うべきでしょうか。

私たちもこの章の最初に記されていたような様々な困難、戦い、絶体絶命のピンチ、切実な願いを持つ状況に置かれることがあるでしょう。しかし今日の箇所から学ぶのは、そんな私たちにはなす術がないのではないということです。私たちには祈りという、それらを上回る真に力強い戦いの武器、手段が与えられています。私たちは果たして共に集まり、心合わせて祈ることを大事にしているでしょうか。具体的に主に祈っているでしょうか。思いついたようにではなく、継続的に祈り続けているでしょうか。そして熱心に祈っているでしょうか。主は欠けだらけの私たちの祈りを用いて、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて、ご自身の最善を私たちの上に豊かに施してくださるのです。